

西周の訳語の研究

著者	手島 邦男
号	129
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/10097/14566

て しま くに お
手 島 邦 夫

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第129号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	西周の訳語の研究
論文審査委員	(主査) 教授 村上雅孝 教授 齋藤倫明 教授 佐藤伸宏 助教授 小林隆

論文内容の要旨

第一章 序論

一 研究の目的

本研究は、明治初期に啓蒙思想家として活躍し、哲学や論理学などの分野で今も用いられる多くの学術用語を創造したことで知られる、西周の訳語に関する研究である。

本研究は西周の使用した訳語及び造った訳語についての種々の観点からの研究であるが、中でもとくに、西周が用いた漢語の形態をとる訳語はいかなる出自をもつ語であるのか、その中で彼の新造語と推定できる語にはいかなる語があるのか、という点を明らかにし、それに基づき従来の説の修正を試みることを第一の目的としている。

次に、現在も定着している西周の訳語を調べ、とくに西周の訳語が普及した要因について、種々の視点から考察することを第二の目的とする。

右の動機と問題点は次の通りである。

第一の目的の動機は、西周の訳語について調査していく中で、従来言われてきた西の新造語に、漢籍に典拠をもつ語がかなり混じっていることに気づいたため、より正確な調査で西周の新造語を明確なものにしたいと思ったことにある。

従来言われてきた「新造語」については、次の二点で問題があったと考えられる。

- ① 本来古典からの転用語、もしくは漢訳洋書等からの借用語であるにもかかわらず、調査に不備があり、「西周の新造語」とされてきた語がかなりあったのではないか。
- ② 転用語と新造語は分けて論じられるべきものであるが、今まではどちらも「西周独自の

語」として、混同して論じられる傾向があったのではないか。

本研究では、可能な限り正確な調査を行うとともに、過去に日中のどちらにも存在しなかった語形の語を「新造語」と認め、転用語と新造語とは分けて論ずるという立場を取ることとした。それは転用語の価値を新造語の下位に置くということではなく、新造語を明確にすることがまず求められるべき課題であると考えたからである。

第二の目的については、幕末・明治期に輩出した多くの啓蒙思想家の中で、とくに西周の使用した創造した訳語がよく知られているが、実際にどれだけの語が定着しているのかを明らかにし、その理由についても知りたいと考えたことにある。

西周の訳語がとくに普及した理由に関しては、栗島紀子(1966)が次のように記している^(注1)。

- ① 西周の訳語が今日まで生き残っているのは、第一に、術語という特殊な世界の言葉であり、術語は一度決められたら変わりにくい性格をもっているため。
- ② 第二に、西周の前には適当な訳がなく、その訳語が必要とされたときに適当な訳語を提供したのが、西周だったのではないか。

この二点はいわば消極的な理由であり、筆者は、より積極的な理由が他にあるのではないかと考えるようになった。そしてそれは、西の訳語のもつ言語的な理由と、その背景にある言語外(社会的)の理由に分けて考察できるように考えられたのである。

このほか本研究では、西周の訳語の語種上の特色や著作ごとの訳語の特色、また造語方法の特色などについても明らかにすることを目的とした。

二 研究の方法

訳語の収集については、西周の主要な著作や論文、翻訳書、稿本等から、原語の英語が示されている語、訳語の下や左右に原語を示す片仮名が記されている語を全て採った。音訳語は除いた。主要な著作等とは、次の八種である。

- ① 西洋学問概論の講義録「百学連環」(明治7～)、② 論理学書『致知啓蒙』(明治7)、③ 『致知啓蒙』の稿本である「学原稿本」(明治2)と「五原新範」(明治3～6)、④ 西洋哲学史及びコント哲学の概説書(稿本)「生性発蘊」(明治4～6)、⑤ 『明六雑誌』の諸論文(明治7～8)、⑥ 翻訳書『利学』(明治10)、⑦ 翻訳書『心理学』(明治8～12)、⑧ 『心理学』以降の諸論文^(注2)。

テキストは主に『西周全集』第1～第4巻(1981、宗高書房)を使用した^(注3)。

訳語の源流(出自)調査にあたっては、『日本国語大辞典』『大漢和辞典』『漢語大詞典』の三者を中心に、『索引本佩文韻府』『辞源』、中村元『仏教語大辞典』等も参考にして漢籍や仏典、国書における用例や出典の有無を確認した。また『英和对訳袖珍辞書(初版・再版)』『和英語林集成(初版)』『附音挿図英和字彙(初版)』及びメドハーストやロブシャイトの『英華字典』など辞書からの影響についても調査し、さらに佐藤亨、杉本つとむ氏等の先行研究も参考にした。

調査した訳語は、漢籍や仏典、国書の有無を基に次の四種に分類した。

- A 漢籍や仏典に典拠があり、近世までの国書にも用いられた語
- B 漢籍や仏典に典拠があるが、幕末や明治初期になって用いられるようになった語
- C 漢籍や仏典の典拠は不明で、主に近世以降の国書に用例を見出せる語
- D 漢籍・仏典や近世までの国書に用例なく、幕末や明治初期の新語の可能性のある語

右のBには転用語を多く含み、Cは和製漢語で蘭学による新造語を含み、Dには西周ら明治の啓蒙思想家の新造語のほか、中国清末の洋学書や英華字典からの借用語もここに含めている。

西周の訳語の流通や定着については、次のような観点で調査を行った。

- (1) 西周の使用した訳語が、その原語の訳語として現在も用いられているかどうか。
- (2) 西周の新造語に限定した場合は、どの程度定着して用いられているか。
- (3) 西周の新造語で、もとの原語の訳語ではないが、現存している語はどの位あるか。

西周の使用した訳語や新造語が現在も用いられているかどうかという調査には、『研究社新英和大辞典（第五版）』『小学館ランダムハウス英和大辞典（第二版）』平凡社『哲学事典』『岩波哲学・思想事典』等により調査した。また西周の訳語が、『哲学字彙（初版）』（明治14）を経て『英和字彙（第二版）』（明治15）により広められたことについての調査には、『附音挿図英和字彙（初版）』（明治6）についても調査した。

三 先行研究の問題点

西周の訳語の先行研究としては、事典での記述を含め9人12種の論考や紹介があるが、西の訳語を全面的に扱ったものは、先にふれた栗島紀子（1966）だけである。

この栗島（1966）は西周の訳語の本格的な研究であり、その後の論考に影響を与えているものであるが、訳語の出展の調査をほとんど諸橋『大漢和事典』に負っていて、その結果挙げている「西周の独自の語」には、漢籍に典拠がありながら西の新造語とされているものが散見されるのである。また他の論考においても、西周の新造語について、「西周の語」「西周の独自の語」などという表現が多く、そこでは純然たる新造語と、古典から採って新しい意味を付与した転用語との区別が明瞭でないことが指摘できる。

第二章 西周の訳語

一 訳語数・語種・漢語の字数

収集した訳語の数や原語の英語数は次の通りである。

- ① 訳語の原語（英語）数（異なり）……………1952
- ② 収集した訳語の総数……………3234
- ③ 著作毎の重複を除いた訳語数……………2872
- ④ 訳語の異なり数……………2459

④の訳語数は、栗島（1966）における訳語1441語より約一千語上回っている。訳語の語種別では、句187・語2272、語は和語239・漢語2006・混種語27に分けられた。漢語が語の88%をしめ、それは『英和对訳袖珍辞書（初版）』の句訳の語と比較しても確認され、西周がそれまでの句訳を漢語訳に代えることに貢献した思想家の一人であることが確認された。

漢語の字数では二字漢語が64%と最も多かったが、3字以上の漢語も28%をしめ、それは二字漢語を基に、新しく造語された漢語が多い可能性を示唆すると思われた。

二 著作別の訳語の特色

ここでは西周の、訳語がとくに多い主要な著作四種の訳語の特色について論じた。「百学連環」の訳語については、その西洋の学問概論という内容からくる、①訳語数の多さ（延べ1487）、②訳語の属する学問分野の多様さ（自然科学・人文科学・社会科学の三分野がほぼ三等分され

ること)、そして③先行英和辞書からの影響は三割程度であること、などが特色として挙げられる。

「生性発蘊」については、①西が傾倒したコントの実証主義哲学からくる、生物学や生理学上の訳語の多さ、②「百学連環」とは異なり『袖珍辞書』からの影響はほとんどなく、『英華字典』からの語も一割ほどで、先行辞書によることは少なかったこと、③「生性発蘊」の訳語は、西周の訳語の変遷（修正）過程の中で中間的、分岐的な性格をもっていることなどを指摘した。

『致知啓蒙』については、①論理学という特殊な領域の専門学術書であるため、幕末や明治初期の新語の割合が53%と、他の書に比べ最も高率なこと、②西周の新造語として知られる多くの哲学・論理学上の専門語がこの書に見られること、が挙げられた。

『心理学』は、刊行された西周の著作の中では比較的よく読まれた書で、①大部の翻訳書であることからくる訳語数の多さ、②西周の訳語として知られている語がほぼ出そろっていること、西の多くの訳語の修正もほとんどこの書で終了していることから、本書は西の訳語の集大成であると言い得ること、などを指摘した。この『心理学』は、訳語の収集が今後も多く見込まれる書である。

第三章 西周の訳語の源流

一 訳語の出自

西周の使用した二字以上の漢語1894語について、先に漢籍や仏典の典拠の有無を基準に分類したが、その数と比率は次の通りであった。

- A 漢籍・仏典に典拠があり近世までの国書にも用いられた語……………628 (33%)
- B 漢籍・仏典に典拠があるが幕末や明治になって用いられた語……………328 (17%)
- C 漢籍・仏典の典拠は不明で主に近世以降の国書に見られる語…………… 92 (5%)
- D 漢籍・仏典や近世までの国書にもない幕末や明治初期の新語……………846 (45%)

漢籍や仏典に典拠をもつ訳語とたない訳語との割合は1対1でほぼ同数、また漢籍や仏典に典拠をもつ訳語で、以前から国書にもあった語と幕末や明治になってから用いられた語（転用語）との割合は、ほぼ2対1である。そして半数近い語が、幕末や明治初期になって造られた（或は中国から移入された）新語であることがわかった。

ただこのDには三字以上の漢語が多く含まれる。三字漢語には学問名や党派名などの西の新造語が多く、当然Dの比率が高くなることが予想された。そこで二字漢語1325語を分類すると、次のような結果となった。

- A ……46% B ……24% C …… 6% D ……24%

AとBで、約7割の語が漢籍や仏典に典拠があり、幕末・明治初期の新語は約4分の1に減ることがわかった。しかし4分の1といっても300を超えており、二字漢語は純然たる語基創造といってよいことから、やはりかなりの新造語が当時生産されたと見なせる。

二 英華及び英和辞書からの影響

西周が当時の英華辞書や英和辞書を、どの程度利用して訳語を選定したのか調査した。まずロプシャイトの『英華字典』と一致する西周の訳語は、全体の約一割でその大部分を「百学連環」の訳語がしめた。即ち西周は、初期においては『英華字典』を比較的よく利用したことが

知られた。

英和辞書については、まず『袖珍辞書（初版・再版）』『和英語林集成（初版）』『諳厄利亜語林大成』の三種からの影響について論じた。『袖珍辞書（初版・再版）』と『和英語林集成（初版）』については、その利用の可能性について手島（1998a）で指摘していたが^(註4)、本稿では新たに『和英語林（初版）』の利用事実の傍証を挙げ、さらに日本最初の英和辞書である『諳厄利亜語林大成』の利用についてもその可能性を推定した。

次に『和英語林（初版）』と『附音挿図英和字彙』を取り上げ、「百学連環」の訳語との関係について論じた。この両者は明治5～6年の刊行で、「百学連環」にやや遅れるが、他の辞書にはなくて「百学連環」と一致する語が、それぞれに存在する。「百学連環」は未刊の講義録であるためこの三者間の影響関係は考えにくく、本稿ではこれらの書に先行する国書や洋学書からの影響について推定し、その解明を今後の重要な課題とした。

第四章 西周の新造語

一 新造語の認定とその結果

本研究の中心たる位置をしめる本章では、まず新造語の認定方法について論じた。詳述はさけるが、先に出自により分類したDの訳語（846語）を対照に、多くの辞書や先行研究等の資料を基に西周の新造語を推定した。

その結果、かなりの確率で西周の新造語と推定される語は、699語であった。これは漢語1894語の約37%、分類Dの語の83%にあたることがわかった。

新造語は字数によって性質が異なると考えられたため、A（二字漢語）・B（三字漢語）・C（四字以上の漢語）に分けて論じた。新造語Aは西周の純然たる語基創造で、彼の新造語としてよく知られた訳語がここに散見される。Bの三字漢語は、新造語の中で最も数が多い。これは主に既成の二字漢語に接尾語を下接させたもので、西が学術用語として数多く生産したものである。ただし現在まで残っている語は比較的少ない。Cの四字以上の漢語も残存している語は少ないのであるが、四字漢語の場合は、主に既成の二字漢語＋二字漢語で、五字漢語は四字漢語に接頭語や接尾語がついた語が多い。

これらの調査で判明した西周の新造語は、全を一覧の形で本論文の末尾に示している。

二 先行説の修正

以上明らかになった新造語を基に、西周の訳語の主要な先行研究である栗島紀子（1966）をはじめ、『国語学研究事典』（「西周」の項）、『国語学大辞典』（「訳語」の項）、広田栄太郎（1969）などの説^(註5)の修正を行った。これらの説で西周の新造語とされていて、今回漢籍に典拠のある転用語と判明したのは、次のような語である。

栗島（1966）……還元 感性 帰納 交換 合成 細胞 思考 純全 衝動 総合 体験
転換 抱合 命題

『国語学研究事典』……帰納 演繹 思考 先天 後天 命題 現象

『国語学大辞典』……観念 観察 意識 義務 情緒 弁証

広田（1969）……帰納 客観 現象 論理学

以上のように従来の説では、漢籍や仏典に存する語でも西周の新造語として論ずることが多かった。その原因は次のように考えられた。

- (1) 多くの論考、とくに栗島（1966）では、『大漢和辞典』のみに典拠の有無の判断を負っており、出典などの情報に限界があったこと。
- (2) 従来の論考では、西周の純然たる新造語と、古くから漢籍や仏典にあった語に新しい概念を付与した転用語とを、ともに「西周独自の語」として混同して論じる傾向があったこと。転用語も訳語の問題としては重要であるが、過去になかった語形としての新造語とは、区別して論じられるべきものと考えられる。
- (3) アカデミズムにおける西周の権威により、西周の造語でなくても、西が使用したという事実をもって、漠然と彼の造語と考えられる傾向があったのではないか。

三 西周の造語方法

西周の造語方法について、現時点で考え得る次の四種について考察を行った。

- (1) 『致知啓蒙』に見られる、和語による句訳から漢語訳への修正による造語
- (2) 手島（1998a）で示したような、辞書の語の修正による造語
- (3) 三字漢語に多く見られる、既成の二字漢語＋接尾語による造語
- (4) 自らの新造語の、更なる修正による造語

これらは筆者が研究の過程で気づいた造語方法を順次挙げたもので、今後より体系的な考察とそれに基づく分類が必要となると考えられる。

第五章 後世への影響

一 西周の訳語の定着

西周の使用した訳語で、現在もその英語の訳語として通用しているものは606語ほどで、調査した2872語の21%であった。およそ二割の語が用いられ、それは著作別の訳語でもほぼ同様である。ただ一般的な語が多い著作に比べ、専門的な術語が多い『致知啓蒙』や「生性発蘊」は、現在も通用する訳語はやや少ない。一般に、専門的な領域での独創的な新造語については、流通する度合いが高くはなかったものと思われる。

一方西周の新造語の定着に関しては、新造語と推定される約700語のうち、定着して今もその原語の訳語として用いられている語は、44語（6.3%）で次のような語である。

印刷術 演繹法 外延 概括 蓋然 概念 解剖学上ノ 感受性 帰納法 極端 具体的
肯定 細胞状 子音 死語 自己意識 十字軍 主我者 主観 焦点 生理学 積極 全称
潜熱 属性 対偶法 抽象 抽象的 抽象力 彫刻術 直覚 定義 哲学 哲理 道德家
特称 内包 能動 否定 包摂 法律学 保守党 本能 理想

そしてこの他に、その原語の訳語としては使われないが、日本語としては用いられている西周の新造語がある。次にまず二字漢語の例を挙げる。

句論 原権 絞刑 硬質 再現 脂質 主格 所助 単元 断言 反証

次に三字漢語の例を挙げる（四字以上の漢語には見られない）。

音声学 慣習法 急進党 共和党 虚無党 語原（源）学 自生的 社会党 人種学
生活力 先天説 創造力 地方税 地方病 道德論 人間学 認識力 非金属 文章史
分類表 保守党 民権党 立法形 歴史学

以上のように、やや特殊な専門語もあるが、ここには「硬質・再現・断言・生活力・創造力・認識力」などのように、日常一般にも使われるようになった語も多い。

先の44語と、二字漢語の11語、三字漢語の24語の計79語（新造語の11.6%）が、西周の新造語として現在も残っている。結局西周の使用した訳語は、全体で約2割が流通して定着し、新造語は約1割が今も通用していることがわかった。

二 訳語の流通の要因

訳語の流通の要因については、「言語的要因」と「言語外要因」とに分けて論じた。言語的要因として、①同時代の他の思想家と比較しての訳語の新しさ、②訳語の原語を示すルビの多さ、③著書中の訳語についての自注の多さ、の三つを挙げた。具体例は省略に従うが、これらは同時代の他の書との比較において言える特色である。

次に言語外要因（社会的要因）として、①『哲学字彙（初版）』による西の訳語の採用、②訳語が『哲学字彙（初版）』を経て『英和字彙（第二版）』へ継承されたこと、③アカデミズムにおける西周の影響、などが考えられた。

以上の要因のうちどれが主たる要因であるかと考えた場合、「言語的要因」はいずれも数量的に実証するのがやや困難であり、現実的には「言語外要因」における①と②が大きく、またその背景にあるともいえる③（アカデミズムにおける権威）が、言語的要因以上に、西周の訳語の普及に力があつたのではないかと考えられた。

第六章 結 論

序論で述べた二つの主な研究目的について、それぞれの調査と考察の結果を記す。

第一の目的は、西周の訳語の源流を明らかにした上で、西の新造語を可能な限り推定し、それに基づき従来の説の修正を試みることであつた。

本論では訳語を出自によって分類し、そこから新造語を約700語ほど挙げ、それを漢語の字数によって分けて各々の特質を考察した。また栗島（1966）をはじめとする先行研究の説を修正した。従来の説で漢籍等にありながら西周の新造語としていた理由として、(1)訳語の典拠を主に『大漢和辞典』により判断したため情報に限界があつたこと、(2)新造語と転用語がともに「西周独自の語」として論じられることが多かつたこと、(3)西周が使用したこと、彼の造語と考えられる傾向があつたのではないかと指摘した。

第二の目的は、現在も定着している西周の訳語を調べ、とくに西周の使用した訳語が多く流通した要因について考察することであつた。

西周の使用した訳語は全体で約二割が流通して定着し、新造語は約一割が今も通用していることがわかった。その理由として「言語的要因」と「言語外要因」とに分けて論じたが、『哲学字彙』による西の訳語の継承や、アカデミズムにおける西周への信頼や権威などの「言語外要因」（社会的要因）の方が、要因として大きかつたのではないかとした。

以上の主要な論点の他、西周の訳語の特色、造語法の特色などについても論じた。

[注]

- 1 栗島紀子（1966）「訳語の研究－西周を中心に－」東京女子大学『日本文学』27、87頁。
- 2 「『心理学』以降の諸論文」とは、明治8年の「海関税ノ説」から明治19年「心理説ノ一斑」までの18編の論文である（いずれも『西周全集』所収）。
- 3 『西周全集』の他、『明六雑誌』は『復刻版明六雑誌』（1998、大空社）を、『心理学』は国

立国会図書館蔵本と東北大学附属図書館蔵本を、『利学』は森岡健二編著『近代語の成立 明治期語彙編』（1969、明治書院）における成果を使用した。

- 4 手島邦夫（1998a）「西周『百学連環』の訳語と幕末期英和辞書」『国語学研究』第37集。
- 5 広田栄太郎（1969）『近代訳語考』東京堂出版、307－311頁。

論文審査結果の要旨

本論文は、「序論」と「結論」を含め全六章と資料編とから成る。

「序論」は、三節からなり、第一節では、研究の目的について述べる。第一の目的は、西周が用いた漢語の形態をとる訳語はいかなる出自を持つ語であるのか、その中で彼の新造語と推定できる語にはいかなる語があるのかという点を明らかにし、従来の説の修正を試みていることである。第二の目的は、現在も定着している彼の訳語を調査し、とくに彼の訳語が普及した要因について考察することである。その動機は、従来言われてきた西周の新造語と言われる語の中に、漢籍に典拠を持つ語がかなり混じっていることに気づき、彼の新造語といわれるものを正確にしたいとしている点にある。また、彼の訳語が実際どれだけの語が定着しているのか、その要因は何かを考えたいということも動機の一つである。

第二節の研究の方法であるが訳語の収集については西周の主要な著作、論文、翻訳書、稿本などから原語が示されている語や訳語の下に原語を示す片仮名が記されている語をすべて採っている。著作とは、「百学連環」、「致知啓蒙」、「学原稿本」、「五原新約」、「生性発蘊」、「明六雑誌」、「利学」、「心理学」その他である。訳語の出自の調査は、辞典類を中心に漢籍、仏典、国書における用例や出典の有無を確認するという方法をとる。それらの訳語は、漢籍、仏典、国書の有無を基に四種に分類する。さらに訳語の定着や流通についても辞典類を中心に調査を行った。

第三節は、先行研究の問題点を指摘する。西周の訳語の研究は、これまで事典を含めいくつかの論考があるが全面的に扱おうとしたのは栗島紀子（1966）だけである。栗島は、訳語の出自をほとんど「大漢和辞典」に負っている。それ以後刊行された辞典などの資料を利用していないのは言うまでもない。栗島論文のみならず、他の論考も「西周の独自の語」というような曖昧な表現に終始しており、西周の純然たる新造語と古典から採って新しい意味を付与した転用語との区別が明瞭でないとするのである。

第二章は、西周の訳語について考察する。第一節では、訳語数、語種、漢語の字数について考察する。収集した訳語の総数は、3234語であり、訳語の異なり数は2459語である。語種別では、句187、語2272で、和語は239、漢語2006、混種語27であり、漢語が圧倒的に多いことが確認された。これは、西周がそれまでの句訳から漢語訳に代えることに貢献した人であることを意味するとする。

第二節では、著作別の訳語の特色について論ずる。「百学連環」の訳語については、西洋の学問概論という性質上訳語の多さ、先行辞書の影響などを指摘する。「生性発蘊」については、西周の訳語の変遷過程の中で中間的、分岐的な性格を持つことを述べる。「致知啓蒙」については、新語の割合が高率なこと、新造語として知られる専門語がこの書に多く見られることを言う。「心理学」については、西周の訳語の集大成であることを力説している。

第三章は、西周の訳語の源流についての研究である。西の使用した二字以上の漢語を典拠の有無を基に分類する。(1)漢籍、仏典に典拠があり近世までの国書にも用いられた語628、(2)漢籍、仏典に典拠があるが幕末や明治になって用いられた語328、(3)漢籍、仏典の典拠は不明で主に近世以降の国書に見られる語92、(4)漢籍、仏典や近世までの国書にもない幕末や明治初期の新語846、となっているとする。これを見ると半数近い語が幕末や明治初期になって造られた新語であることがわかる。

第二節は、英華辞書、英和辞書からの影響について述べる。西が、当時の英華辞書や英和辞書をどの程度利用して訳語を選定したのかについて調査する。ロプシャイトの「英華字典と一致するのは全体の二割でその大部分は「百学連環」の訳語である。英和辞書については、「袖珍辞書」、「和英語林集成」(初版)、「譜厄利亜語林大成」の影響について詳細に論じていて、その影響度が判明した。

第四章は、西周の新造語について論ずる。まず新造語認定方法について述べ、西周の新造語と推定されるのは699語であることを指摘する。これは分類(4)の八割であるとする。字数では、三字漢語が最も多い。次に先行説の修正を行っている。従来の説では西の新造語とされる語が実は漢籍に典拠があることなどを指摘する。これは、当時の辞典のよったこと、新造語とされるものが新造語と転用語を分けずに認定していることなどに原因があるとする。更に西の造語方法についても考察している。これによって従来の説が大幅に訂正、修正されたことになる。

第五章は、西周の訳語の後世への影響について論ずる。まず西の訳語の定着に関してである。彼の使用した訳語で、現在もその英語の訳語として通用しているものは606語であるとする。これは全体の二割である。一方西の新造語の定着に関しては、新造語699語の内、定着しているのは44語である。このほか、言語の訳語としては使われていないが、日本語としては用いられている西の新造語がある。二字漢語が11語、三字漢語が24語である。先のと合わせ79語になる。結局彼の訳語は、全体で二割が、流通し、定着して、新造語は一割が今も通用していることとしている。これによって西の訳語の定着に関してより明確になったと言える。次に訳語の流通の要因について考察している。この要因は、言語的要因と言語外要因に分けることができる。言語的要因としては、①訳語の新しさ②訳語の原語を示すルビの多さ③著書中の訳語についての自注の多さ、の三つをあげている。言語外要因は、①「哲学字彙」による西の訳語の採用、②訳語が「哲学字彙」(初版)を経て漢和字彙(第二版)へ継承されたこと、③アカデミズムにおける西周の影響、などが考えられたとする。とくに①と②の影響が大きかったのではないかと考えている。これらは適切妥当な考え方であると思われる。

第六章の結論では、序論で述べた研究目的についてそれぞれの調査と考察の結果を述べている。資料編ではすべての訳語が分類され示されている。

以上、本論文は、西周の訳語に関して国語学的に詳細に考察し、多くの資料を調査することによって訳語の出自を検討し、新たに新造語を認定することによって従来の説を大幅にしかも明確に修正している。その研究成果は、これまでの研究を大きく前進させたもので西周の訳語の研究のみならず日本語史における近代語の研究に寄与し、かつ新生面を開くものと言いうことができる。

よって、本論文の提出者は博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。